日中学術交流に参加して

2019年10月８日から11月15日まで、奈文研と中国社会科学院との間に交わされた友好共同研究議定書にもとづき中国に滞在しました。この事業は昨年度に再開したもので、今回が２年目となります。

滞在中は、北京の社会科学院考古研究所を拠点に、揚州、洛陽、西安にそれぞれ１週間から10日程度滞在し、自身の専門である瓦の調査を軸に発掘調査現場や遺跡を訪れました。今回の滞在では、残念ながら中国の発掘調査に参加することはできませんでしたが、藤原京や平城京と同時代の唐代の瓦をじっくりと観察することができました。中国では、日本の瓦のように瓦当や製作技法から、細かな年代を知ることは容易ではありません。揚州城や隋唐洛陽城、唐長安城から出土した膨大な量の瓦を目の前にして、中国の瓦研究の難しさを実感しました。同時に、各地域の技法の特徴や地域性などを把握することができ、今後の研究につながる足がかりを得ることもできました。

また、11月７日には研究所主催の学術講座にて、藤原宮の瓦について発表する機会をいただきました。講座には所員をはじめ、北京大学の学生等も聴講に訪れ、たくさんの質問や貴重なコメントをいただきました。講座の後の交流会で、達成感と安堵感とともに食べた北京ダックの味は忘れられません。

私は中国語がほとんど話せないので、滞在中は自身の考えをうまく伝えることができず、そんな自分にもどかしさを感じることもありました。しかしながら、研究所の皆さんは私の意思をくみ取り、できる限りの研究環境を整えてくださいました。この場を借りてお礼申し上げるとともに、今後も学術交流が継続し、発展するよう微力ながら尽力していきたいと思います。　（都城発掘調査部　石田 由紀子）

揚州での瓦調査の様子

中央アジア旧石器調査成果の刊行

日本も含めた現在の世界の考古学界では、新人のユーラシア拡散の実態解明が最大のテーマとなっています。奈良文化財研究所はこのような学術的な背景を鑑みて、2009年から2012年の４年間にカザフスタン、タジキスタン、ウズベキスタン、キルギスの中央アジア４ヵ国で、旧石器時代の遺跡踏査や資料調査を実施しました。

その結果、ユーラシア大陸の中央部をパミール高原やザラフシャン山脈、天山山脈の山麓に沿いながら西から東へ先史人類が拡散していったかつての道すじが見えてきました。パレオ・シルクロードの発見というべきでしょう。2015年以降の最近５年間になってようやく、欧米露の一流の研究所や大学が中央アジアで野外調査を展開していますが、彼らに先んじて多大な成果を上げたのです。

そこで2019年から奈良文化財研究所研究報告の枠組みで、ユーラシア考古学研究資料として刊行し、その成果を一般に広く公開することにしました。2019年に『カザフスタン後期旧石器文化の研究』を、2020年に『タジキスタン中期旧石器文化の研究』を刊行しました。しばらくは成果報告を続けていくことになりますが、すべての成果を刊行し終えたその先には、世界に向かってユーラシア先史学を刷新する新たな地平を提示することになるでしょう。

奈文研は、アジア各国で多年にわたり、文化遺産保護のための国際協力事業を通じて深い信頼関係を醸成してきました。その信頼関係を背景として初めて可能になった革新的な調査研究成果の刊行事業が、ようやく始まったのです。

（都城発掘調査部　国武 貞克・文化庁　芝 康次郎）

カザフ国立大学での資料調査